

月夜

須崎榮麿

小松本秀

障子を開けて顔を出した。オレンヂ色の空には、はつきりと黒雲が月を隠してゐる。

あゝあの雲が逃げ出したなら、美しい盆のやうな月が出るのだ。ちつと靜かに雲の動きを見つめた。黒雲の一隅は白色を帯びて來た。

もう月は間もなく出るであらうと思つてゐた時、かたかたと言ふ音がしたので後を見たが誰も居ない。月は次第に姿を現した。ぱつと顔に光を投げ疊の上に長い自分の影が映つた。

月は全く雲を出て銀色に美しく照り輝いてゐる。前の屋根、近くの草木まではつきりと見える。其の向ふは隣家の屋根だ。横も屋根、波の如く連なる屋根、一面は明るく一面は暗く、月に照らされた夜の屋根の波も、又靜かに一種の興味がある。

僕は再び月を眺めた。昔から月では兎が餅をついてゐると云ふが、よく見るとそんな風にも見える。

今夜もあの月を天文学者が研究してゐるんだらう。僕はこんな月をみるとなんとなく故郷かなつかしくなる。

月は高く一面のものを照してゐる。何もかも青白く光つてゐる。(中一)

靜かな朝

ポツン／＼、ピチリ／＼涸れかゝつた水鳴樓の瀧壺には築山の水が變な音調でひつきりなしに落ちてゐる、簾を通して靜かに氣持ちの良い風が自分の方に吹きつけて來る、部屋の中では柱時計が「カチ／＼」とさも忙がしさうになつてゐる。

瀧壺の水の音と時計の針の音だけがやかましいやうに此の物以外の何物も皆音をひそめてひっそりとして居る。誰かの蒲團の上で猫が夏だのに寒いのかと思はれるやうにうづくまつて居る。そよ／＼と風が吹く度に時々頭をふつては眠つて居る、眼を眞一文字に閉ぢてゐる、此の猫を見ると不斷見る時よりもずつと可愛らしい様な氣がする。

風は相變らず自分の體に氣持良く吹きつけて來る、裏山にパツと朝日が輝やいた。佛殿の屋根が一層明るくそびえて見える。七面山、追分の山が遠く見える。

青い空と濃い緑の山々の中に点々として見える建物、今その一隅に立つて僕はお山の朝の靜かな景色をながめて居る。

(中一)